

外部評価実施報告書

項目別評価	評定
教育（人文社会科学部）	A
教育（社会文化システム研究科）	C
研究	B
組織・管理運営	C

評定は以下の4段階から選択願います。

- A 非常に優れている。
- B 優れている。
- C 相応である。
- D 不十分である。

令和2年 3月 24日

氏名 : 渡邊洋一 (自署)

【優れている点】

学部教育において、PBL をとりいれた実践科目や「データ処理実習」・「統計学基礎」・「社会調査法基礎」というジェネリックスキル科目を必修および選択必修科目とする一方、グローバルスタディーズコースにおいて海外研修を必修化するなど、社会的要請に応えようとしている点は高く評価できます。

また、すべてのコースで卒業研究を必須の卒業要件としたことも、学部の卒業認定・学位授与の方針に合致した学修のゴールとして非常にわかりやすいと考えられました。

従来の人文学部が、どちらかといえば基礎的能力の涵養に主眼を置くと見られがちであったことを考えれば、現在の社会的要請に率直に応えようと非常に困難な改革をなされているものと推察します。

【改善を要する点】

地域と連携した教育の一つとして学部共通科目「インターンシップ」を開設し、参加する学生も年々増えているようです。しかし最近は、企業の側も学生の側も、インターンシップを就職活動の一環として考えられている傾向が指摘されているようです。本来の主旨である地域社会に積極的に関わる意識の醸成になっているか検証が必要と思われます。

2018年度には研究倫理に関わるコンプライアンス研修会を実施しているようですが、日常的に問題も起こりやすいハラスメントについては、学習環境に大きな影響を及ぼすこともあります。その防止に向けた活動がわかりにくいのは残念に思われます。問題が微妙で取り扱いが難しいことは理解できますが、学生が社会に出てからも直面しやすい問題であり、教職員・学生の誰もが加害者にも被害者にもならないよう、さらに積極的な取り組みを示すことが望されます。

社会文化システム研究科については、最新の大学院教育が従来の教育とどのように違っているか十分には示されていないように思われます。

【助言、提言等】

新しい人文社会科学部として非常に多くの試みに着手されているが、卒業生を出して1つのサイクルが循環する頃合には再検討することも必要と思われます。新しい試み、地域の課題解決に関連した実践科目や科学的思考と技能を要請するジェネリック科目、そして海外留学、などが短期的な成果に結びつくものでないことは承知していますが、たとえば卒業研究としてどの程度反映させることができたのかとか、卒業生や就職先の満足度調査のような、学外にわかりやすい成果を示すことも重要なと考えます。